

コロナ禍に伴う子どもの「いのち・生活・学び・発達」の危機の現状と 発達支援の課題

【シンポジスト】

高橋亜美氏（アフターケア相談所「ゆずりは」所長）

内田良氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

竹内章郎氏（岐阜大学名誉教授）

【コーディネーター・司会】

高橋智氏（日本大学文理学部教育学科教授・東京学芸大学名誉教授）

田部絢子氏（金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授・日本子ども学会理事）

世界的な新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックによる心理的感情的な苦痛、貧弱な社会的相互作用、遊びや娯楽の機会の欠如、封鎖による行動制限は、子どもにおいて膨大な不安・緊張・抑うつ・ストレス等を蓄積し、それに伴う各種の発達困難を引き起こしていることが想定される。

子どもの不安は身体化されやすく、長期化するコロナ禍において健康危機・社会的孤立・経済不況などの多様なストレスが子どもの精神的・身体的な困難を引き起こしたり、うつ症状などを悪化させるとの報告もみられる（国立成育医療研究センター：2021a、大阪府立大学山野則子研究室：2021）。さらにコロナ禍の2020年度に不登校とみなされた小中学生は19万6127人で過去最多となり（文部科学省：2021）、小中高校から報告のあった自殺した児童生徒数も調査開始以降最多となっている（文部科学省：2022）。パンデミックに伴う学校閉鎖や社会的制約は、「教育や身体活動、社会的発達の機会を奪われることを意味」し（内海：2020）、子どもの健康被害やQOLの低下に繋がることも危惧されている（森内：2021）。

国際的にも子どもを学校システムに再統合するための措置を講じる必要性やパンデミックに係る意思決定プロセスにおいて子どもの意見を聴く機会を提供するべきとの指摘があるが（The Committee on the Rights of the Child：2020、WHO：2021、The World Bank：2022）、コロナ禍の子どもの気持ちや子どもを取り巻く問題は注目を集めておらず（Petretto ほか：2020）、社会や政府は成人に焦点を合わせていて子どもの声をほとんど聞いていない（Nijman ほか：2021）という指摘もある。

本シンポジウムでは、コロナ禍における子どもの「いのち・生活・学び・発達」の困難・リスクを明らかにし、そのなかにあって果たすべき学校教育・発達支援の意義・役割と展望について子ども・当事者の声をふまえながら議論していく。高橋亜美氏にはコロナ禍における生きづらさを感じている若者の相談の変化とその実相を報告していただく。内田良氏にはコロナ禍における子どもの生活実態等や学校教育の役割にかかわる研究成果を報告いただく。竹内章郎氏には哲学者の立場からコロナ禍で生きる子どもの生活・発達・学校教育の今後の展望について提議いただく。なお、本報告にあたり報告すべき利益相反事項はない。

高橋智（コーディネーター・司会）：東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学、博士（教育学）。日本大学文理学部教育学科教授・東京学芸大学名誉教授・放送大学客員教授。日本特別ニーズ教育学会代表理事・日本特殊教育学会副理事長・法務省矯正局外部アドバイザー等歴任。主要著作に『城戸幡太郎と日本の障害者教育科学』、『講座・転換期の障害児教育』全11巻、『特別支援教育大事典』、『史料・日本近代と「弱者」第1集』全10巻、『障害百科事典』全5巻、『日本特殊教育学会学術用語集』ほか。

田部絢子（コーディネーター・司会）：東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座修了、博士（教育学）。金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授。専門は特別ニーズ教育・特別支援教育。本学会理事のほか、日本特殊教育学会・日本特別ニーズ教育学会の理事・編集委員。主要著作に田部絢子（2014）『私立学校の特別支援教育システムに関する実証的研究』風間書房、田部絢子・高橋智（2019）『発達障害等の子どもの食の困難と発達支援』風間書房など。